

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32527

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730470

研究課題名(和文) ギャンブル依存症からの回復プログラムの効果測定

研究課題名(英文) The Effect Measurement of the Recovery Program for Pathological Gamblers

研究代表者

川口 由起子 (KAWAGUCHI, YUKIKO)

植草学園大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：90531624

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：ギャンブル依存症の深刻度を測る尺度の日本語版の開発について検討するために、回復プログラムが行われている民間の施設で、ギャンブル依存症者を対象に質問紙調査を行った。対象とした回復プログラムの実施期間は89～173日で、アルコールリクス・アノニマスの12ステップ・プログラムに基づいて作成されたリカバリー・ダイナミクス・プログラムの実施が含まれていた。回復プログラムに参加した55人を実施群、回復プログラムに参加しなかった16人を対照群とし、得られた結果を踏まえ、回復プログラムの効果測定のための方法について検討した。

研究成果の概要(英文)：In this study we conducted a questionnaire at a private treatment center in Japan in order to develop the Japanese version of scale to examine the severity of pathological gambling. The length of program in the center was 89 to 173 days, involving Recovery Dynamics Program which was based on the twelve step program approach in Alcoholics Anonymous. In the present study, 55 gamblers were in the experimental group; 23 gamblers were in the control group. Based on the results, the effectiveness of recovery program in question was discussed.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：依存症 ギャンブル依存 病的賭博 アディクション アルコールリクス・アノニマス リカバリー・ダイナミクス

## 1. 研究開始当初の背景

本研究がギャンブル依存症と呼ぶものは、病的賭博や強迫的ギャンブリング (Pathological Gambling) とも呼ばれ、WHO 国際疾病分類第 10 改訂 (ICD-10、1990 年) によって、病気、精神的障害とされている。現在、日本国内では、強迫的に繰り返されるギャンブル行為が依存症という病気であるという認識は、医療専門職の分野でさえ浸透しているとは言い難い。その原因は、第一に、ギャンブル依存症の具体的な症状および心理的特徴を含めた深刻度 (重症度) を客観的に評価するための調査が実施されてこなかったことにある。第二の原因は、ギャンブル依存症者を対象とする依存症からの回復を目的とするプログラム (以下、回復プログラムとする) の効果と有効性が、科学的に十分に妥当な方法で示されてこなかったためである。アメリカを始めとする欧米諸国では、有病率や罹患率の計算だけでなく、治療、回復、社会復帰のための方策 (目的によって異なる各種プログラム) の有効性についての研究が行われてきた。これらの研究成果の積み重ねにより、依存症において病気、治療、回復の各概念が指し示す内容や、症状のリスト、依存症が引き起こす現象の特徴付けも整理され、共有されている。また、依存症は、疾患であるという意味において医学の対象である一方、心理学的、社会学的アプローチが極めて有効であるとの先行研究があり、1960 年台以降、医療機関よりも、公的あるいは民間運営の福祉施設や、心理カウンセリング等を中心とした臨床的治療施設で回復プログラムが提供されることが多い。日本国内の依存症者を支援する病院や民間施設も回復プログラムを提供しているが、少なくとも 1970 年代から有効性を見込まれ続けてきたにもかかわらず、その方法論とプログラムの有効性の検証について

は多くが体験談的なものにとどまってきた。

ギャンブル依存症の症状や心理的傾向性を評価する既存のツールには、イエール・ブラウン強迫性障害尺度の病的賭博への適用尺度 (PG-YBOCS)、ギャンブル徴候査定尺度 (G-SAS)、サウス・オクス・ギャンブリング・スクリーン (SOGS)、ギャンブル依存症者のための自助グループであるギャンブラーズ・アノニマス (GA) が提供する「20 の質問」等がある。このうち、PG-YBOCS、G-SAS、SOGS については妥当性の検証等の研究が行われているが、これらの尺度と関連する先行研究はすべて英語によるものであり、日本語で利用することができない状況であった。GA の「20 の質問」のみ、日本語に翻訳したものが公表されているものの、これは日常的な行動について当てはまるものを数えるチェックリストであり、第三者的な評価のツールとして利用するには役不足である。つまり、ギャンブル依存症の深刻度を評価するための尺度は日本には存在せず、それゆえ、ギャンブル依存症の深刻度や症状が軽減、消滅したことを客観的に示すツールもなかった。したがって、回復プログラムの有効性を判断することは不可能であった。本研究の準備的調査により、前述した既存の英語尺度は、アメリカを中心に欧米諸国で、回復プログラムの効果測定に利用されていることがわかった。また、回復プログラムの効果を科学的に示すためには、依存症を持つ人の心理的・社会的属性をあらゆる要素の分析と、各要素における変化の測定評価が必要であるとの認識に至った。心理的、社会的な問題を持つ人に対する既存の支援は、カウンセリングのような臨床心理的なものから、雇用支援のような社会的なものまでさまざまであるが、実際に有効なプログラムをより広く利用できるようにするためには、その効果を測定するための客観的な道

具立てを含む学術的な裏付けが必要不可欠である。研究代表者が兼任研究員として関わってきたアディクション研究センターと母体を同じくする、奈良県にある民間の研究協力施設であるセレニティー・パーク・ジャパン（以下 SPJ とする）は、2011 年 4 月に開設され、同年 10 月までのおよそ半年で、38 名の入所者があった。本研究開始前の聞き取り調査から、施設スタッフの評価では、強迫的ギャンブル行為と強迫的衝動がおさまったことを回復とみなしていること、また、この意味における SPJ での回復率がおよそ 75～90%と見込まれていることが明らかになった。この回復率は、これまでの入所者を分母としそのうちの回復者を分子とする計算によるものだが、あくまでも施設スタッフの臨床的経験に基づく評価であり、また、施設スタッフの勤務年数や専門的研修の有無にもばらつきがあるため、学術的な裏付けと研究として妥当な手続きを欠いているという意味で、客観的評価として認められにくいと予測していた。しかしながら、75～90%というのは非常に高い数値であり、このことから SPJ に採用された回復プログラムは、依存症問題に関わる臨床の専門家の注目を集めてきた。これまで、依存症者への回復支援の分野では、当事者の経験によって肯定的に評価されたプログラムが重要かつ効果的であるとされてきた。したがって、SPJ で実施されているプログラムを、学術的に妥当かつ信頼できる手法で評価する意義は大きい。本研究で見込まれる成果は、ギャンブル依存の問題からの回復プログラムを学術的に評価するためのツールを初めて提供するという点で独創的だと考えた。研究計画時には、ギャンブル依存症の日本語の尺度がなく、日本国内のギャンブル依存症者を対象とする質問紙調査もほとんど行われてこなかった。本研究の特色は、日本で初めてのギャンブル

依存症の回復プログラム有効性調査となることであった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ギャンブル依存症の症状とされるものを持つ人々が、民間の施設等で採用されてきた回復プログラムを実施することによって得られる効果の測定を、ある程度客観的な方法によって行うことであった。対象は、日本国内におけるギャンブル依存症者の可能性が高く、かつ、研究協力先の国内の民間施設 SPJ、および、その関連施設に相談等で接点を持った人とした。回復プログラムの効果測定の方法には、ギャンブル依存症の症状を把握するための質問調査紙の作成、および、当該回復プログラムの実施群と対照群とに対する初期調査、追跡調査が含まれる。

## 3. 研究の方法

研究期間は 2 年であった。計画では、1 年目に、先行研究の整理と分析、関連資料の翻訳、日本語の質問紙の作成、募集したギャンブル依存症者の研究参加者の募集、彼らに対する第一回目の質問紙調査を行い、2 年目に、第一回目の質問紙調査の参加者に対する追跡調査（第二回目調査）の実施、および、そこで得られるデータの整理と分析を行う予定であった。質問紙調査の目的は、(a)ギャンブル依存症者を対象とする質問紙調査の項目として妥当とみなせるもの、(b)日本国内のギャンブル依存症者の実例について、年齢や性別、職業、経済的状态（年収や債務の有無等）の関連の 2 点を明らかにすることであった。本研究の具体的な内容は、下記の 5 点である。

### (1) 日本語の質問紙調査の作成

前述した英語の既存の尺度を翻訳し、また、ギャンブル依存症者のための自助グループであるギャンブラーズ・アノニマス

(GA)が提供する「20の質問」日本語版とあわせて、内容的に共通してギャンブル依存症者に共通の特徴を記述していると思われる項目を抜き出し、日本語版の調査質問紙を作成した。この質問紙の項目の内容については、依存症を専門として扱う医師に専門的助言をもらうとともに、ギャンブル依存症の当事者(回復者)とギャンブル依存症を扱う民間施設のスタッフ(プログラム実施管理担当者および施設長)に内容のわかりやすさと適切さについて意見をもらい、回答しやすいように適宜修正を行った。

## (2) 日本国内のギャンブル依存症者の募集と質問紙調査の実施

(1)で得られた質問調査紙を用いて、ギャンブル依存症者に調査を実施するために、研究参加者の募集を開始した。具体的には、奈良県にある研究協力施設 SPJ の施設長と東京窓口のスタッフに、本研究の趣旨を説明したうえで、SPJに直接訪問して相談、あるいは間接的に接触した人に、本研究への参加を打診していただいた。なお、間接的な接触とは、たとえば、依存症の疑いのある人の家族等からの相談をきっかけに本人に接触を試み、治療介入をする行為(インタベンションと呼ばれる)を含む。インタベンションでは、とくに介入の始めでは本人が依存症であることを否定するケースもあるが、これは依存症者の特徴として広く認められる<否認>という状態である可能性が高い。また、インタベンションを依頼する家族は、当該の人に繰り返されてきた依存行為を事実として認識したうえで依頼するので、本人の自己認識にかかわらず、依存的行為は確認されている。したがって、このような人にギャンブル依存症者である自己認識がともなっていないケースであっても、本研究の調査に含むことに問題はな

いと判断した。協力依頼では、本研究の概要と調査方法を記載した説明文書を参加者に渡し、内容の詳細とプライバシーの保護について説明し、参加するかどうか決定していただいた。参加者の協力を得る際に留意すべき医学的な点については、ギャンブル依存症を専門とする精神科医である佐藤拓氏に必要に応じて助言を得た。記載してもらった質問調査紙は、匿名化し、項目ごとに集計した。

## (3) 実施群と対照群の分割、ギャンブル依存症のための回復プログラムの実施記録と先行研究との比較検討

(2)で参加の承諾を得た参加者を、実施群と対照群とに分割する。依存症は「否認の病」とも言われ、生活上の困難(たとえば多重債務や失職、家庭崩壊など)に直面している依存症者であっても、自分が治療が必要な病気であり、回復のための支援を受け入れる必要があるとう現実を否定する場合がある。したがって、本研究の計画段階から予測されていた困難は、SPJに接触する依存症の疑いのある人のうち、回復プログラムへの参加を希望する人の割合が少なくなるだろうことであった。そこで、本研究では、参加を了承し、かつ、回復プログラムの実施も了承する参加者を実施群、参加を了承したものの回復プログラムを実施しない参加者を対照群とした。実施群と対照群との比較の妥当性を確保するために、実施群の参加者それぞれについて、(1)の質問紙の項目が類似する参加者(年齢、性別、年収等が同じか近い人)を対照群から選び、それらをペアとして比較分析を行う計画であった。この作業と並行して、本研究が調査対象とする回復プログラム(12 step プログラムに基づく Recovery Dynamics 他)の実施記録を取り、その内容について、国内外で実施されている依存症回復プログラ

ムおよびその先行研究との比較検討を行った。

#### (4) 実施群と対照群の参加者の追跡調査

参加者に対して、(1)で実施した後のギャンブル依存の状態（たとえば、最近ギャンブル行為をしたか）および、心理的状态（たとえば、ギャンブルをしたい衝動があるか）等について、追跡調査を行った。調査結果は、(1)同様に匿名化し、項目ごとに集計した。ただし、比較するために、(1)で回答した人と同一の人であることがわかるような状態で保存した。

#### (5) 回復プログラムの効果の分析と評価

研究計画では、(4)までで得られた結果について、統計解析ソフトウェアを利用し、実施群と対照群との差を検証することを計画した。この結果有意な差が示されれば、本研究が対象とする SPJ の回復プログラムのギャンブル依存症者に対する有効性を評価できると判断したからである。

### 4. 研究成果

第一の研究成果は、3(1)で述べたように、日本語版の質問紙を作成したことである。本研究では、この質問紙がギャンブル依存の深刻度をはかる尺度としてどの程度の信頼性を有するかという点までは明らかにできなかったものの、日本語で利用でき、かつ、ギャンブル依存症の専門的知識を持つ医師と回復率が高いとされている治療施設のプログラム担当者によって監修された一連の質問紙としては、初めてのものであり、利用価値があると見込んでいる。第二の成果は、質問紙調査で、(少なくとも第一回目の質問紙調査に回答した参加者を含め)71人分の回答を得たことである。回答者のうち、69人が男性、2人が女性であり、平均年齢は34.56歳、回復プログラムを実施した人の平均年齢は34.70歳（すべて男性）

実施しなかった人の平均年齢は34.06歳（うち男性14人、女性2人）であった。調査に用いた SPJ の回復プログラムには、アルコールクス・アノニマス(AA)で実施されてきた12ステップ・プログラムを基礎とするリカバリー・ダイナミクス・プログラム(略称はRDプログラム)を含んでいた。回復プログラムは、一日におよそ7時間、週に5日行われ、そのうちRDプログラムには週におよそ4~6時間があてられていた。また、プログラムの参加者は、自助グループへの参加を週に8時間程度義務付けられていた。

実施群が参加したこのRDプログラムは、最短で89日、最長で173日実施されたことがわかった。3(3)で前述したように、本研究の計画段階では、SPJに接触する依存症の疑いのある人では、回復プログラムへの参加を希望する人(実施群)が希望しない人(対照群)より少なくなるだろうと予測していた。しかし、実際に調査を行った結果、予想に反して、回復プログラムへの参加を希望しない人(対照群)のほうが全体に占める割合が少なくなった(71のうち16)。予想と逆の結果になったものの、実施群と対照群との割合が同じにならないであろうという予測は正しかったので、計画通りの方法、すなわち、年齢や依存に至っていた時点での状況等の類似点を手がかりにペアを作成して回答結果を比較するという方法を採用することができた。この方法で作成したペアは7組である。なお、二回目の質問紙調査の回答率が予想を大幅に下回ったため、二回目の調査の依頼を数回にわたり出すことになり、結果的に回答を集計する時期が遅延した。そのため、予定された研究期間内では作成した7組の集計結果の詳細な分析を十分に行うことができず、これを今後の課題とせざるを得なかった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1 件)

川口 由起子、自分とは異なる心身状態にまつわる言語表現の意図概念について、情報文化研究会、2013 年 12 月 8 日、國學院大學文学部

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

川口 由起子 (KAWAGUCHI, Yukiko)  
植草学園大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：90531624

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし